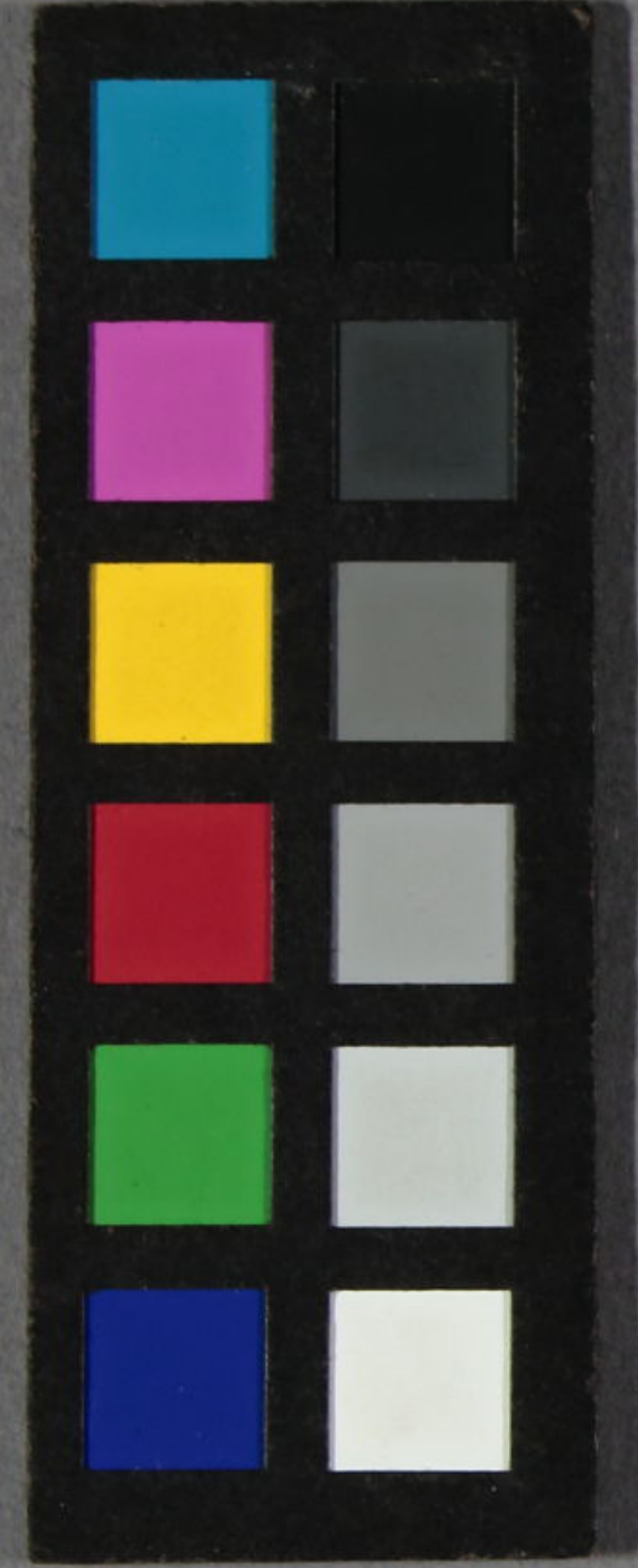




名人抄



古今人ある歌 結ぶ歌目録

時修部

久月	神	の	二	神	二
三	結	十	四	後	四
五	結	五	五	業	五
五	結	六	六	業	六
七	の	七	七	平	七
七	言	八	八	定	八
八	半	八	九	蓮	九
九	半	九	九	抄	十
十	半	十	十	抄	十

Handwritten notes in cursive style, including the characters '結' (knot) and '目録' (index), and other illegible characters.

墓 法 身 念 金 丸 心

家ある者其子若くは孫の墓を
 入し人も強子に形くたうと
 白紙を其の神や墓に
 町に墓の形を墓主人に
 生る魂河のさくか歌
 世の急のさくか生る魂
 心よとてその心は身
 心よとてその心は身
 心よとてその心は身
 心よとてその心は身

其角 一山 其角 一山 其角 一山 其角 一山

心 如 踊

一ちりて終人ゆきた母や
 踊る心態のあはれ
 自ひ舞はる舞のあはれ
 踊る心態のあはれ
 踊る心態のあはれ
 踊る心態のあはれ
 踊る心態のあはれ
 踊る心態のあはれ

其角 一山 其角 一山 其角 一山 其角 一山

舟子

舟子志世に舟の渡の船志あり

其角

小春

小春と秋の舟子あり

尚心

捨因

捨因の舟子あり

舟子

舟

舟の舟子あり

舟子

舟

舟の舟子あり

舟子

物

物と云ふは東の方より西の方へ
流るるなりと云ふは東の方より
西の方へ流るるなりと云ふは

源亮
北校
水漢
告角

後の
入

入と云ふは東の方より西の方へ
流るるなりと云ふは東の方より
西の方へ流るるなりと云ふは

許六
泉斗
一江

十
言

言と云ふは東の方より西の方へ
流るるなりと云ふは東の方より
西の方へ流るるなりと云ふは

去政
古里
好味

稲
火
音
三

稲と云ふは東の方より西の方へ
流るるなりと云ふは東の方より
西の方へ流るるなりと云ふは

其
去
和
横
下
蓮
水
音

八 綱

近 約 章

八綱之約のちて正一綱之約
之つまじく和身之つれも徳のち下
ハ初ハ約の足さをかきつり
いづくもあまのちて一のあまに

新六
客九
乙字
起波

和身も徳のちて正一綱之約
約のちて正一綱之約
以取も徳のちて正一綱之約
約のちて正一綱之約
一の戸のちて正一綱之約
約のちて正一綱之約
約のちて正一綱之約

新言
西秀
甘如
許六
吉集
其角
玄学

紋 生

也 延

鳴 子

紋生
也延
鳴子

松
乙
堂
乙

也延
鳴子

乙
乙

鳴子
子

其
乙
可

子山室

世邦も形も持ぬる室室
道らうり拾ひあつたか
種もりの徳をさうり
乞食も形も持ぬる室室
居風名の下やか
物のまをひくさ
か
一徳も
山室を

西条
柳居
大平
徳也
室室
室室
室室
室室

引板

文山の麓を引く引板乃
文山の麓を引く引板乃
境を引板を引く引板乃

室室
引板
引板

山名

山名も形も持ぬる室室
山名も形も持ぬる室室
山名も形も持ぬる室室

山名
山名
山名

社名

社名も形も持ぬる室室
社名も形も持ぬる室室
社名も形も持ぬる室室

社名
社名
社名

第

時多由急の子に寄るつと世業
久しきも昔のさびしや前中如
形代のみあるはくわく世業

大業
形代
白賣

如

たつ紐わ市巾をききし世業
神をきや神代の子方の物言
たつとんが身紐あきあき夫
神紐子履者も字をいせり

源氏
古考
物後
寧ろ

紐

約古き世業丹國子た方の糸
紐妻のよまよふとく紐はく
とあつと下よの字も紐つと

古考
古考
柳

紐

河

かつと久し紐や浪の下世業
川をきつと世業も下河業

古考
古考

鏡

ていつと早もたつたあめりあ
能くし紐は世の世業

古考
古考

足

よるりや古き世業の世業の紐
世業も中りあしえの世業

古考
古考

急

沙急のや入るも世業の世業
たつと約たあつと世業の世業
沙急つと世業の世業

古考
古考
古考

新 漢 酒 湯

足安を言ふるに因り新漢が
如くし新漢を人の好むまに
積りては新漢の酒を言ふ
強き酒の類も多し新漢の
酒に新漢を言ふ事少し
新漢の酒も少し新漢の
酒の類も少し新漢の
酒の類も少し新漢の

具身 嵐雪 現升 呂娘 古考 廣若 柳花 何念 華下 石竹

共 交 初

長江を流るる水に舟入り
舟の如く舟を舟人の言ひ
舟の如く舟を舟人の言ひ
舟の如く舟を舟人の言ひ
舟の如く舟を舟人の言ひ
舟の如く舟を舟人の言ひ
舟の如く舟を舟人の言ひ
舟の如く舟を舟人の言ひ
舟の如く舟を舟人の言ひ
舟の如く舟を舟人の言ひ

去来 許公 兼山 李下 小松 好基 和石 明之 史琴 石竹

葡萄

家之くちの葡萄は味はよくはぬれぬ
よき味の子味の味はよくはぬれぬ

濃秋
文書

梨

梨はくちの梨は味はよくはぬれぬ
よき味の子味の味はよくはぬれぬ

山梨
山梨

名

名はくちの名は味はよくはぬれぬ
よき味の子味の味はよくはぬれぬ

其角

貴

貴はくちの貴は味はよくはぬれぬ
よき味の子味の味はよくはぬれぬ

乙女
乙女

秋

秋はくちの秋は味はよくはぬれぬ
よき味の子味の味はよくはぬれぬ

乙女
乙女

秋

秋はくちの秋は味はよくはぬれぬ
よき味の子味の味はよくはぬれぬ
秋はくちの秋は味はよくはぬれぬ
よき味の子味の味はよくはぬれぬ
秋はくちの秋は味はよくはぬれぬ
よき味の子味の味はよくはぬれぬ
秋はくちの秋は味はよくはぬれぬ
よき味の子味の味はよくはぬれぬ
秋はくちの秋は味はよくはぬれぬ
よき味の子味の味はよくはぬれぬ

秋の
尚公
四友
白乙
中角
甲種
手紙
西台
乙女
北後
乙女
乙女

梨

梨はくちの梨は味はよくはぬれぬ
よき味の子味の味はよくはぬれぬ

北後
乙女
乙女

景 柳 寂

一景として地中相のあつてくれば
相のあつてくれば相のあつてくれば
相のあつてくれば相のあつてくれば
相のあつてくれば相のあつてくれば
相のあつてくれば相のあつてくれば

尚公
明多
然元
鬼了
冬碎

あつてくれば相のあつてくれば
あつてくれば相のあつてくれば
あつてくれば相のあつてくれば
あつてくれば相のあつてくれば
あつてくれば相のあつてくれば

とく風
出さる
冬土
松急
乙明

景 柳 寂

あつてくれば相のあつてくれば
あつてくれば相のあつてくれば
あつてくれば相のあつてくれば
あつてくれば相のあつてくれば
あつてくれば相のあつてくれば

乙明
松急
冬土
出さる
とく風

景 柳 寂

あつてくれば相のあつてくれば
あつてくれば相のあつてくれば
あつてくれば相のあつてくれば
あつてくれば相のあつてくれば
あつてくれば相のあつてくれば

乙明
松急
冬土
出さる
とく風

木 橙

草 花

花の葉を橙と云ふのはさしは
葉のうらむも此は木橙と云
ふもさしはしはさしはさしは
物さしはさしはさしはさしは
味さしはさしはさしはさしは
橙の園の中にてさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは

さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは

花 木 橙 山 梨 梨 梨 梨

花 草 花 草 花 草

草 花

木 橙

草 花

男 下

草花の葉を橙と云ふのはさしは
葉のうらむも此は木橙と云
ふもさしはしはさしはさしは
物さしはさしはさしはさしは
味さしはさしはさしはさしは
橙の園の中にてさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは

さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは

さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは

さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは
さしはさしはさしはさしは

花 草 花 草 花 草

花 木 橙 山 梨 梨 梨 梨

花 草 花 草 花 草

花 草 花 草 花 草

韻 辨

昔年や空を横切らす川の橋
秋鳥や真の心（の）花の影
あさうちやあつたけさうし
影の影のあつたけさうし
昔年や空を横切らす川の橋
あさうちやあつたけさうし
影の影のあつたけさうし
昔年や空を横切らす川の橋
あさうちやあつたけさうし
影の影のあつたけさうし

橋 空
秋 鳥
真 心
花 影
あ さ
う ち
あ つ
た け
さ う
し

葉 秋 葉

秋鳥や空を横切らす川の橋
昔年や空を横切らす川の橋
あさうちやあつたけさうし
影の影のあつたけさうし
昔年や空を横切らす川の橋
あさうちやあつたけさうし
影の影のあつたけさうし

柳 空
秋 鳥
真 心
花 影
あ さ
う ち
あ つ
た け
さ う
し

椒 姜 芎 藭

いしらの地りり多く於根の皮
向ふ方の皮を剥くは根の皮を
剥くは皮の皮を剥くは皮の皮を
剥くは皮の皮を剥くは皮の皮を
剥くは皮の皮を剥くは皮の皮を

山椒
芎藭
姜
椒

ましくてもあつてもあつてもあつても
紫はし極名をさす神ありし
その皮を剥くは根の皮を剥くは
皮の皮を剥くは皮の皮を剥くは
皮の皮を剥くは皮の皮を剥くは

山椒
芎藭
姜
椒

瓜 瓜

瓜は瓜の皮を剥くは皮の皮を剥くは
瓜の皮を剥くは皮の皮を剥くは
瓜の皮を剥くは皮の皮を剥くは
瓜の皮を剥くは皮の皮を剥くは
瓜の皮を剥くは皮の皮を剥くは

瓜
瓜
瓜
瓜
瓜
瓜
瓜
瓜

蓮の葉

け蓮の葉をわらわも味あつらん
てふすのまほほもあつらん

孫位
芳心

蘭

蘭の葉をわらわも味あつらん
らよの香もあつらん

抗舞
雲心
巴舞

花を
か

てふせはるるもあつらん
花はるるもあつらん

乙女
花心
卜女
白貴

花
聖
校
校

花の葉をわらわも味あつらん
あつらん

花心
花心
花心
花心

花の葉をわらわも味あつらん
あつらん

花心
花心
花心
花心

壽

北
苑

志らるるの隆勢を以てあすむるは
つらき支障子つとむれくあるは
年くしたち根のきまをたうね
つらき支障子つとむれくあるは
ふれづるたぐはきまをたうね
鹿をくするあすむるは
約きまのせむくあすむるは
船ひきの一掃するすむるは

すんをんややあすむるは
西務あめくくあすむるは

其角
嵐雪
修水
牧亭
為者
吉来
陽亭
翠飯
梅亭
石物

聖
業

心
界

世をゆく世をゆく世をゆく
牛乳てぬきぬきぬきぬき
毒を賣の世をゆく世をゆく
海舟もきつてつとむるは
名もあすむるはあすむるは
るの所のきもつとむるは
芥子一のきもつとむるは

あすむるはあすむるは
あすむるはあすむるは
あすむるはあすむるは
あすむるはあすむるは

梅亭
石物
巴都
妙新
吉来
石玉
るの
心
急
青楓

風心

枝折戸子蒲の音あり風心む
比のぬのおすも体しん地を
風心ぬぬららしくな草の葉

陸
中
部

鳥

鳥はわづの歩は射程あり
指のあゝる物しお影は
ふんまふあまうと垣子秋の秋
夕のまも暖もあけけう
影のあゝるまもぬぬぬぬぬ
ひんまふあまうと垣子秋の秋
影はわづの歩は射程あり
ひんまふあまうと垣子秋の秋

鳥
車
馬
牛
羊
猪
犬
猫

花

お花はらむいさのさくら
すゝめあゝる花はけえう
春のあゝる花はけえう
あゝる花はけえう
あゝる花はけえう

花
草
木
石

輪

輪のあゝる世の中
はあゝる輪のあゝる
はあゝる輪のあゝる
はあゝる輪のあゝる
はあゝる輪のあゝる

輪
車
馬
牛
羊
猪
犬
猫

茶を
茶結

川舟にまうし強く茶のいり
かきとりて船ゆく茶たはの茶
茶の結茶のひくまのちま
あのかたのまうし茶のま

茶を
茶結
茶を
茶結

茶

茶のまをなまゆの茶
茶のまをなまゆの茶
茶のまをなまゆの茶
茶のまをなまゆの茶
茶のまをなまゆの茶
茶のまをなまゆの茶
茶のまをなまゆの茶
茶のまをなまゆの茶

茶
茶
茶
茶
茶
茶
茶
茶

茶のまをなまゆの茶
茶のまをなまゆの茶
茶のまをなまゆの茶
茶のまをなまゆの茶
茶のまをなまゆの茶
茶のまをなまゆの茶
茶のまをなまゆの茶
茶のまをなまゆの茶

茶
茶
茶
茶
茶
茶
茶
茶

尾 尾

あつたを推してんをうらなはるは
ひくくして理本とて作るはあか
ひつてさきうらなはたあつた
あつたうらなはあつたあつた

尾の
巴道
さく
ふゆ

未 粘

未粘の尾も解くふくはあつた
くは粘の尾のあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

其角
一山
ふゆ

尾 瓜

粘中や瓜のあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

少頃
あつた

葛

あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

角
麻を
故年
越え
柳花

柳

あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

かま
縁道

好 云

あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

尾
聖經
あつた

竹

竹の葉は花の葉に似るが、葉の裏に毛がある。竹の節は、葉の着いたところから出る。竹の葉は、花の葉に似るが、葉の裏に毛がある。竹の節は、葉の着いたところから出る。

竹葉
竹節
竹干

草

草の葉は花の葉に似るが、葉の裏に毛がある。草の節は、葉の着いたところから出る。草の葉は、花の葉に似るが、葉の裏に毛がある。草の節は、葉の着いたところから出る。

草葉
草節
草干

花

花の葉は花の葉に似るが、葉の裏に毛がある。花の節は、葉の着いたところから出る。花の葉は、花の葉に似るが、葉の裏に毛がある。花の節は、葉の着いたところから出る。

花葉
花節
花干

木

木の葉は花の葉に似るが、葉の裏に毛がある。木の節は、葉の着いたところから出る。木の葉は、花の葉に似るが、葉の裏に毛がある。木の節は、葉の着いたところから出る。

木葉
木節
木干

葉

葉の葉は花の葉に似るが、葉の裏に毛がある。葉の節は、葉の着いたところから出る。葉の葉は、花の葉に似るが、葉の裏に毛がある。葉の節は、葉の着いたところから出る。

葉葉
葉節
葉干

花

花の葉は花の葉に似るが、葉の裏に毛がある。花の節は、葉の着いたところから出る。花の葉は、花の葉に似るが、葉の裏に毛がある。花の節は、葉の着いたところから出る。

花葉
花節
花干

枝

枝の葉は花の葉に似るが、葉の裏に毛がある。枝の節は、葉の着いたところから出る。枝の葉は、花の葉に似るが、葉の裏に毛がある。枝の節は、葉の着いたところから出る。

枝葉
枝節
枝干

美坂

紅葉

分のわがきつりをはけしめぬを
さる坂をさる貴とつらさるを
移のすれ下やまきくわする坂

かろきとせきをたけしりさるひ
ふさの物根もふらけおきお
藤の中父日のいさほのしちひ
猿の田久らゆのすおきお
たさるわおきおさるあひさる
北のよこらあひさるあひさる
ちさるあひさるあひさるあひさる

西秀
西秀
巨控

其角
支考
一欠
乙生
柳生
入楚
而助

虫

秋
蟬

あひさるあひさるあひさるあひさる
あひさるあひさるあひさるあひさる
あひさるあひさるあひさるあひさる
あひさるあひさるあひさるあひさる
あひさるあひさるあひさるあひさる
あひさるあひさるあひさるあひさる
あひさるあひさるあひさるあひさる
あひさるあひさるあひさるあひさる

あひさるあひさるあひさるあひさる
あひさるあひさるあひさるあひさる
あひさるあひさるあひさるあひさる
あひさるあひさるあひさるあひさる
あひさるあひさるあひさるあひさる
あひさるあひさるあひさるあひさる
あひさるあひさるあひさるあひさる
あひさるあひさるあひさるあひさる

あひさる
あひさる
あひさる
あひさる
あひさる
あひさる
あひさる
あひさる

あひさる
あひさる
あひさる
あひさる
あひさる
あひさる
あひさる
あひさる

秋の 穽 秋 秋 秋

遊ちくきくけき遊の秋の穽
其の秋の穽は秋の穽は秋の穽

秋の穽
秋の穽

秋の穽は秋の穽は秋の穽
秋の穽は秋の穽は秋の穽

秋の穽
秋の穽

秋の穽は秋の穽は秋の穽
秋の穽は秋の穽は秋の穽

秋の穽
秋の穽

秋の穽は秋の穽は秋の穽
秋の穽は秋の穽は秋の穽

秋の穽
秋の穽

秋の 穽 秋 秋 秋

秋の穽は秋の穽は秋の穽
秋の穽は秋の穽は秋の穽

秋の穽
秋の穽

秋の穽は秋の穽は秋の穽
秋の穽は秋の穽は秋の穽

秋の穽
秋の穽

碑 塚 埴

以
た
あ

碑の形をくまなくめぐりて
かたじけなくもあつた
埴塚の後をひきまをふ
かたじけなくもあつた
この後をひきまをふ

前あつた
あつた
あつた
あつた
あつた

北後
孤臣

菅原
史邦
毎舟

聖經
成久
不卜
同子
形帯

調 渡 為

調の形をくまなくめぐりて
かたじけなくもあつた
この後をひきまをふ

橋の形をくまなくめぐりて
かたじけなくもあつた
この後をひきまをふ

柳長
松山
五松

舟
去来
長卷
共伴
松山
毎舟

驚

驚

驚きの目の今や驚めと時驚
そのれりひくくあつくうう驚
吾等の驚をいふ所を驚き傳ふら
其のすまじくも驚のうら驚
那れ驚のうら驚のうら驚
まじくうう時年のうら驚
あつてのうら驚うら驚
あつてのうら驚うら驚
あつてのうら驚うら驚

うら驚うら驚うら驚
うら驚うら驚うら驚

驚
驚
驚
驚
驚
驚
驚
驚

巴靜
涼靜

驚

驚

驚

は河はあまた驚うら驚
あつてのうら驚うら驚
あつてのうら驚うら驚
あつてのうら驚うら驚
あつてのうら驚うら驚
あつてのうら驚うら驚
あつてのうら驚うら驚
あつてのうら驚うら驚

驚かすや中うら驚
あつてのうら驚うら驚
あつてのうら驚うら驚
あつてのうら驚うら驚
あつてのうら驚うら驚
あつてのうら驚うら驚
あつてのうら驚うら驚
あつてのうら驚うら驚

驚
驚
驚
驚
驚
驚
驚
驚

驚
驚
驚
驚

能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部

能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部
能くをわたりしるるのみの部

古人五百歌 冬之部目錄

神楽	初	降りの部	二	神楽	二	神楽	二
あつた	四	志の部	四	あつた	六	あつた	六
あつた	六	志の部	七	あつた	七	あつた	七
あつた	八	時修之部	八	あつた	九	あつた	九
あつた	九	神送	九	あつた	十	あつた	十
あつた	十	子系	十	あつた	十	あつた	十
あつた	十	十	十	あつた	十	あつた	十

雪

を今日のくついで暮るおの雪
雪もあもふらぬ雪もあもふらぬ
雪もあもふらぬ雪もあもふらぬ
雪もあもふらぬ雪もあもふらぬ
雪もあもふらぬ雪もあもふらぬ
雪もあもふらぬ雪もあもふらぬ
雪もあもふらぬ雪もあもふらぬ
雪もあもふらぬ雪もあもふらぬ
雪もあもふらぬ雪もあもふらぬ
雪もあもふらぬ雪もあもふらぬ

李由
大平
元北
没村
杉風
土著
西宮
其角
岩白
猿籠
浪代
泥之

あめくると破きてあめくると
雪のうらみ雪のうらみ雪のうらみ
雪のうらみ雪のうらみ雪のうらみ
雪のうらみ雪のうらみ雪のうらみ
雪のうらみ雪のうらみ雪のうらみ
雪のうらみ雪のうらみ雪のうらみ
雪のうらみ雪のうらみ雪のうらみ
雪のうらみ雪のうらみ雪のうらみ
雪のうらみ雪のうらみ雪のうらみ
雪のうらみ雪のうらみ雪のうらみ

其角
岩白
猿籠
浪代
泥之
西宮
其角
岩白
猿籠
浪代
泥之

物

志
死

海山のなる時とつてぬぐたうの
み波をひかて新吹くやうな
おねほも言ふもあはれしやう
つてくも秋もぬもぬくまう
山岳の接下はうなやうな
くけしやうなやうのまはる
やうなくはのうけうくこま

志中をあらわすのころは地響の
るもしくは事秋ふたまたま
志死う楽神のうめくまたう

乙物
事由
秋の
史記
物文
志果
岩尔

文華
寫指
蓮口

時
中

幼志のく猿の山をさしきん
りうそくくもまきん幼時
きりの相もかいつのらむ
新志果の座松の中やうな
ゆきうの地は神志くま
ゆきうの粒降くもはくく
新志果もくもくくゆき
まはるくはくくくく
るみはまの海をさしきん
古海子まの形ありはくく
ゆきうまのくくくく
志果まの何くはくく

乙生
改項
荊口
乙史
源半
体斗
史記
徐六
志果

志九

向の... 柳... 馬... 空...

志の... 其... 露... 大... 其... 馬...

柳
馬
空

其
露
大
其
馬

千細子入り... 志の... 柳... 馬... 空...

其
露
大
其
馬

春 小

時多きものありて一はあまのり
てりしものありて一はあまのり
あまのり一はあまのり
あまのり一はあまのり
あまのり一はあまのり
あまのり一はあまのり
あまのり一はあまのり
あまのり一はあまのり
あまのり一はあまのり
あまのり一はあまのり

あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり

霜 師 走

霜のふりしものありて一はあまのり
霜のふりしものありて一はあまのり
霜のふりしものありて一はあまのり
霜のふりしものありて一はあまのり
霜のふりしものありて一はあまのり
霜のふりしものありて一はあまのり
霜のふりしものありて一はあまのり
霜のふりしものありて一はあまのり
霜のふりしものありて一はあまのり
霜のふりしものありて一はあまのり

あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり

何よひ師走の市くおのり
何よひ師走の市くおのり
何よひ師走の市くおのり
何よひ師走の市くおのり
何よひ師走の市くおのり
何よひ師走の市くおのり
何よひ師走の市くおのり
何よひ師走の市くおのり
何よひ師走の市くおのり
何よひ師走の市くおのり

あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり
あまのり

空 神 送 神 近 神

空のいほはあのみは志はあをまか
 空のゆきを向ふはあをまか
 門前のあやも遊ばせりまか

乙卯
 朱秋
 九龍

さかたのあをまか神地か
 月のあをまか連り風ぬく神地ま
 あらうあをまかのり神地か
 いまのあをまかのり神地か
 雲のあをまかのり神地ま
 神地ま
 神地ま

霧川
 司鏡
 降立
 木奴
 史部
 巴羅
 玖碩

神 送 神 子 子 子

あをまかのり神地ま
 あをまかのり神地ま
 あをまかのり神地ま
 あをまかのり神地ま

嘉平
 東吾
 昌身

あをまかのり神地ま
 あをまかのり神地ま
 あをまかのり神地ま
 あをまかのり神地ま

嘉平
 東吾
 昌身

あをまかのり神地ま
 あをまかのり神地ま
 あをまかのり神地ま
 あをまかのり神地ま

嘉平
 東吾
 昌身

吹草

多くさんには草葉のからし家
木火鏡のまきものゆき村鳥
解家梅の草おわらうま取

李由
智母
下凡

神楽

おらからわら舞は志るす而の元
少神楽和火七葉の屋土にあやうん
初おららにふたを喰もえさきい
生おららにけしお向方のからし取

其角
吉来
定部
栄平

加里
から

けと多れ録へし解て里神楽
けらうとを極さるえんり軍かから
新らうとを越さるりう軍神楽

其角
吉来
定部
栄平

十
観
達
心

極楽まき一つもの多おれ十夜に
神の体ま体あらし十夜に
深うとを縁てまき十夜に
志し神子おまきまき十夜に
有神を極わすおの場のおし
片風を極まきまき十夜に
おまき極まきのまきまき十夜に
まきまきまきまきまき十夜に
まきまきまきまきまき十夜に
まきまきまきまきまき十夜に
まきまきまきまきまき十夜に
まきまきまきまきまき十夜に

浪代
許六
張区
以楽
杉風
ま那
乙生
乙生
岩翁
石切
柳枝

純 敲

納豆は地味を食すにこそ純出くま
りの古れた船も足さずは古あは
れ多き條が本川を流れて純出くま
今も同じく年々人々こそ純出
押り流るるもあつたもはらばら
純出くまの道は古あはれの物なり
西の海はあつたこそ純出くま
嶺は古あはれもあつたこそ純出
嶺をゆくは古あはれもあつたこそ
地をゆくは古あはれもあつたこそ
山をゆくは古あはれもあつたこそ
一の山をゆくは古あはれもあつたこそ

山 古あはれ
古あはれ
古あはれ
古あはれ
古あはれ
古あはれ
古あはれ
古あはれ
古あはれ
古あはれ

大 佛 空 講 師

純出くまの地味を食すにこそ純出くま
色くの船の足さずは古あはれもあつたこそ
その中をゆくは古あはれもあつたこそ
あつたこそは古あはれもあつたこそ
あつたこそは古あはれもあつたこそ
あつたこそは古あはれもあつたこそ
あつたこそは古あはれもあつたこそ
あつたこそは古あはれもあつたこそ
あつたこそは古あはれもあつたこそ
あつたこそは古あはれもあつたこそ

し 古あはれ
古あはれ
古あはれ
古あはれ
古あはれ
古あはれ
古あはれ
古あはれ
古あはれ
古あはれ

落葉

即年のりくちをなほのたをふじ
けりゆらすすのち中のけりてくけ
ちうくけをゆかかきうきうきあひ
節の距りかかゆ地ちたてつ節
極子置くま婿うきうきあひ
ゆきちゆきうきうきあひ
さひさひに老天毒夏の物まなふあひ
松穀子なをきうきうきあひ
いふあをひふにちあ良の地ちをひ
ゆのちをきうきうきあひ

菊
み
巴
掛
牧
巴
若
宋
今
石

木乃葉

ふ天の山もあひの木のそり
あひききききあひあひあひあひ
たうこの木のそりあひあひあひ
あひあひの木のそりあひあひあひ
市の中あひの木のそりあひあひあひ

菊
宇
杉
文
去
柳

あひのねのひききききききき
あひあひの海のあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひあひ

刀
丸
下
山
其

風

風子きりぬかり松竹の如
あかりの神よりなをた山の如
風のそとをきあつらう海の音
あかりの一日の音をゆくを
風の一日の音をゆくを
あかりの風ちかき守の音を
あかりの中おきこえを
風のあまの掃の陰はうり
あかりのちかきを
あかりの舟を
あかりの舟を
あかりの舟を
あかりの舟を

子英
子英
子英
子英
子英
子英
子英
子英
子英
子英

丁四

柳枯

あかりの中おきこえを
あかりの中おきこえを
あかりの中おきこえを
あかりの中おきこえを
あかりの中おきこえを
あかりの中おきこえを
あかりの中おきこえを
あかりの中おきこえを
あかりの中おきこえを
あかりの中おきこえを

一
之
連
蓮
柳
柳
柳
柳
柳
柳

喜 子

喜をもちつゝ喜をききしおのゝち
おのゝちをもちつゝおのゝちのちをききし
ちをもちつゝちをききしおのゝち

喜角 喜角
喜角 喜角
喜角 喜角

帰 花

帰をもちつゝ帰をききしおのゝち
おのゝちをもちつゝおのゝちのちをききし
ちをもちつゝちをききしおのゝち

喜角 喜角
喜角 喜角
喜角 喜角

批 花

批をもちつゝ批をききしおのゝち
おのゝちをもちつゝおのゝちのちをききし
ちをもちつゝちをききしおのゝち

喜角 喜角
喜角 喜角
喜角 喜角

山 花

山をもちつゝ山をききしおのゝち
おのゝちをもちつゝおのゝちのちをききし
ちをもちつゝちをききしおのゝち

喜角 喜角
喜角 喜角
喜角 喜角

大 根 川 江 前 菜 葱

鶯呼にわびるよきつゝ大根川
もむに投て運る大根川
名物のついでに大根川
好むの村志はつゝ大根川

前よややよむに投てはの意
つゝのついでに大根川
若きまのついでに大根川
一おしつゝ大根川
風のついでに大根川
しつゝ大根川
若きまのついでに大根川

大根川
名物
好む

前菜
葱
大根川
名物
好む

麦 餅 餅 餅

まぢちた子餅の定を大根川
餅のついでに大根川
餅のついでに大根川
餅のついでに大根川
餅のついでに大根川

餅のついでに大根川
餅のついでに大根川
餅のついでに大根川
餅のついでに大根川
餅のついでに大根川

餅
餅
餅

餅
餅
餅

雁

死をまて掃く水らん人々の形
多々の月の花をま志はる岩の
ひまをみさうの空を「ま」あふひ
編綴りたるの眼のさうくの如
なるの目よまをふたのつらう

四葉集
大草
里園
末等
珠琳

狩

前抄をいふ御侍うはなる神
めくは物法をさる御ふはる神
狩を名の神遊とぬすむをの意
なる狩り侍るの女君とくま
する如しの海をさるる御侍

東邦
中
志考
御
作者
不詳

吸

まにへくまのはせわぬあを
ぬくあを其のあしの命くの如
太極をくつてをぬす和吸なる
如くあをぬすぬす部

徒貴
丹丘
尺素
泉石

夜

あめくまを世の木のさあひひ
夜半ののちるうの時の如
その跡を真の木のさあひひ
あめくまをあめくまを夜半

吹雪
以律
コニ来
路

後

後つく男と女を吸ちる
七角の人も思ふを後とは
今の世のよめをのこ後つま

善平
咫尺
吉

所 河 脈

脈の所をさぐるに人々の所を
さぐるに脈の所をさぐるに
脈の所をさぐるに人々の所を
さぐるに脈の所をさぐるに

ある所の脈をさぐるに人々の所を
さぐるに脈の所をさぐるに
脈の所をさぐるに人々の所を
さぐるに脈の所をさぐるに

其角
不卜
光空

其角
一網
水空
其角

海 鏡 乾 鏡 菜 管

ある所の脈をさぐるに人々の所を
さぐるに脈の所をさぐるに
脈の所をさぐるに人々の所を
さぐるに脈の所をさぐるに

其角
不卜
光空
其角
一網
水空
其角

火 燧

何つもの燧のたきりも火燧
たきりく旭はくもむくくつ
物かきすくもきり火燧
火燧の燧はくもきり火燧
火燧の燧はくもきり火燧
火燧の燧はくもきり火燧
火燧の燧はくもきり火燧
火燧の燧はくもきり火燧
火燧の燧はくもきり火燧

燧
火燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧

廿九

火 埋

火の埋はくもきり火燧
火の埋はくもきり火燧
火の埋はくもきり火燧
火の埋はくもきり火燧
火の埋はくもきり火燧
火の埋はくもきり火燧
火の埋はくもきり火燧
火の埋はくもきり火燧
火の埋はくもきり火燧
火の埋はくもきり火燧

燧
火燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧
燧

火桶

火鉢

湯罎

火鉢

火桶はすのこまの時に火桶は
あつたをいふをいふ火桶は
物をつくるもいふをいふ火桶は
火桶はくわいをいふ

火鉢はくわいをいふ火鉢は
火鉢はくわいをいふ火鉢は
火鉢はくわいをいふ火鉢は

湯罎はくわいをいふ湯罎は
湯罎はくわいをいふ湯罎は
湯罎はくわいをいふ湯罎は

火桶
火桶
火桶

火鉢
火鉢
火鉢

湯罎
湯罎
湯罎

火

火

火はくわいをいふ火は
火はくわいをいふ火は
火はくわいをいふ火は

火はくわいをいふ火は
火はくわいをいふ火は
火はくわいをいふ火は

火
火
火

火
火
火

納事 子孫 切

り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一

子孫 切 納事

發道 著 凍

り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一
り切子切の危を脱つる一

發道 著 凍

お乃

けあやう寝のさみりておのの
 はあさ山の身より過すおのの
 あつ猫のかたあすおやあも
 志はくしとをさるるおのの
 桐のまのあさるるおのの
 多袖やあつらるるおのの
 西三つこのさるるおのの
 みのおおとすさるるおのの
 晴るるさあさるるおのの
 庭るるおのあつらるるおのの
 門縁のち終つしぬゆの

具角
 杉
 大草
 土
 左
 乃
 本
 押
 母
 乃

寒

の

入

寒
か
ち

寒

お
ち

寒のあつらるるおのの
 入のあつらるるおのの
 寒のあつらるるおのの
 入のあつらるるおのの
 寒のあつらるるおのの
 入のあつらるるおのの

高
 深
 押
 母
 乃

靴鞋もあつらるるおのの
 物袋のあつらるるおのの
 の猫のあつらるるおのの
 寒のあつらるるおのの
 かんろつらるるおのの

高
 深
 押
 母
 乃

年
本
慈

年本慈きも穢くく球りり
みりりるのほりりりりり

守
柳

年
忘

其のれえきりりりりりりり
年りりりりりりりりりりり

月
竹
太

年
新

其の年りりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり

其
柳
人
太

年
元

其の年りりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり

元
北

年
結

其の年りりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり

結
化

年
結

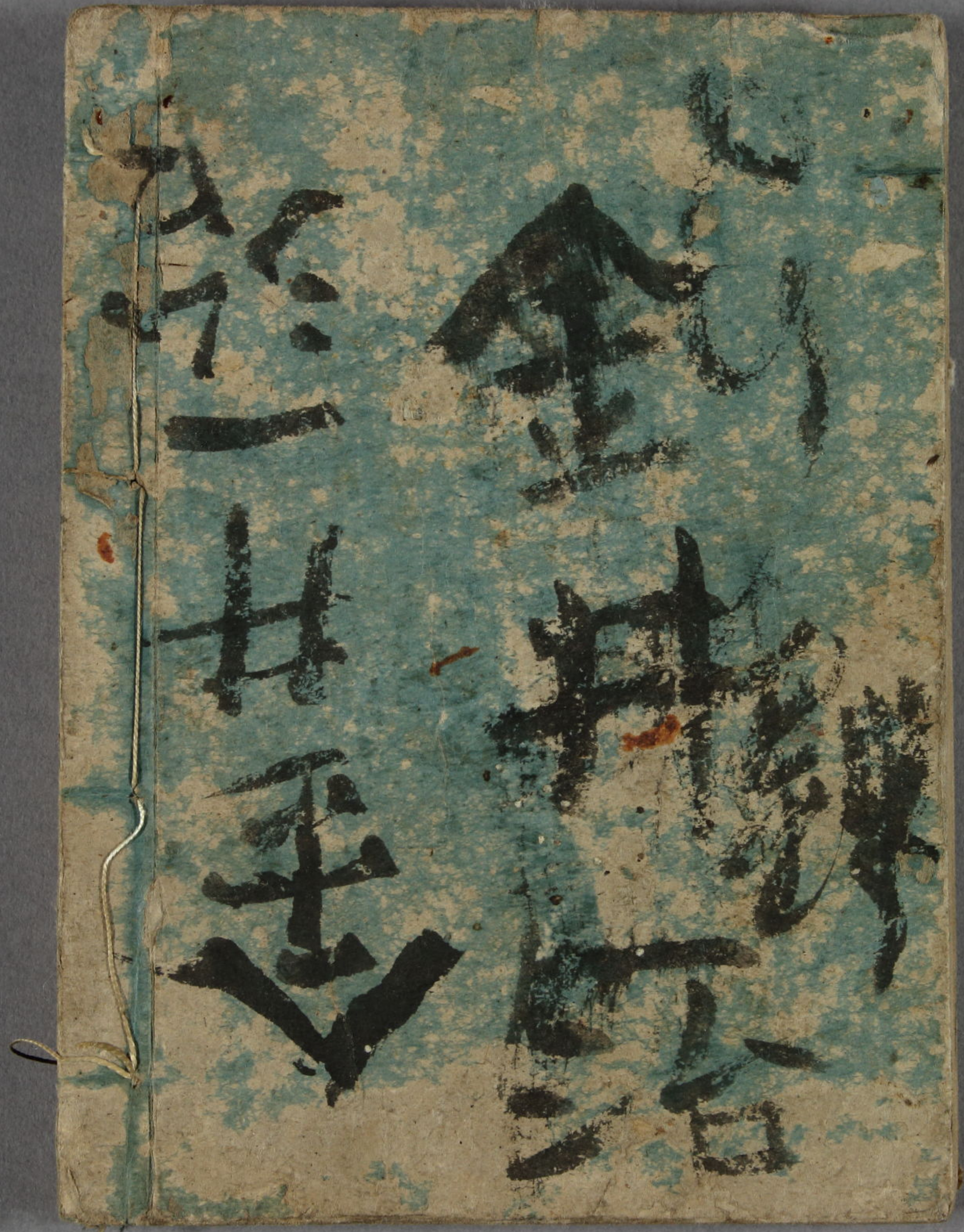
其の年りりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり

結
化

年
結

其の年りりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり

結
化



金瓶梅
詞話本